

## 就職活動に生きる日本語表現教育\* —学生の履歴書指導から見えること—

星野祐子\*\*

### 1. はじめに

大学入試制度の多様化により、学力考査を課さない入学制度で大学入学を果たす学生が、近年、増加の一途にある。「平成26年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」によると、国公立大学を合わせて、AO入試、推薦入試で入学を果たす学生は4割を超える。短期大学に至っては、同試験での入学者数は公立大学で8割となる。もともと、AO入試、推薦入試は、学力考査では計れない受験生の可能性や学生個人の資質、意欲を評価することを目的として導入された入試区分である。しかし、いわゆる「大学全入時代」を迎え、AO入試、推薦入試は本来の目的を失い、学力不問の入試としての側面のみがクローズアップされるようになった。その結果、大学生として相応しい基礎学力を備えていない学生が大学入学を果たすという、看過できない状況を引き起こしている。さらに、一般入試で入学してきた学生との学力差も大きな問題となっている。AO入試、推薦入試の選抜機能は、今や形骸化してしまったと言ってもよいだろう。

本学短期大学部においても、AO入試、推薦入試で入学する学生の割合はかなり高い。入学者の中には高校までの学習内容を十分に身につけていない学生もいる。しかし、学科の特性もあるのだろうか、基礎学力については十分でなくても、ことばや文学、文化や芸術などに関心を持っている学生は多く、表現活動に関しては意欲や伸びしろを感じる。ただ、短期大学部の学生（以下、短大生）の場合、四年制大学の学生と比べて、その伸びしろを伸ばすための時間は十分ではない。短大生の就職活動は1年次、すなわち入学した年に始まる。そのため、彼女たちは、アカデミックスキルと就職活動に備えた社会人基礎力を同時に身につけることが求められる。

短期大学部では、1年次後期必修科目である「文章表現」の時間において、キャリア活動を意識した作文指導を取り入れている。同科目では、まず、主述の呼応や語順、文のねじれなどの項目を扱い、基礎的な表現力を身につける指導を行う。その後、就職活動で必須となる履歴書、エントリーシート作成といった、就職活動に直結する表現指導を行う。彼女たちにとって、履歴書の作成は関心が高く、直後に始まる就職活動を意識して意欲的に取り組む。

\* Japanese Literacy Education for Job Hunting—What We Understand by Proofreading Students' Curricula Vitae—

\*\* Yuko Hoshino 十文字学園女子大学短期大学部 表現文化学科 (Department of Culture and Communication)

キーワード：文章表現 就職活動 履歴書 エントリーシート

本稿では、履歴書指導の過程で見えてきた学生の語彙力・表現力、文章構成力の問題について論じる。そして、本学学生の日本語レベルを適切に把握することで、場面に合わせて語を選ぶ力、相手に魅力的に伝える力、指定された分量で文章を構成する力の育成に関して、効果的な指導法を考えたい。

## 2. 大学生の「書く」ことに関する先行研究

本稿で取り上げる事例のように、履歴書指導は授業内で取り組んでいるケースもあれば、就職支援課やキャリアセンターの専門職員により行われているケースもある。いずれにしても、履歴書を作成するためには、学生自身の自己分析・自己理解が求められるため、アドバイザーとなる者が、対話を重ねることでその学生らしさを引き出し、書くべき内容を厳選していくことが求められるだろう。

さて、大学生の「書く」力について論じた研究には、高大接続や入学前教育の立場から論じる研究、初年次教育の一つとしてアカデミックスキル・スタディスキルの育成に注目する研究、キャリア活動に欠かせない履歴書指導のあり方について論じる研究などがある。例えば、福岡（2011）は日本語の事例を中心に、各大学で行われている入学前教育の実態を報告する。また、高大接続を意識した内容として、千古・中条（2007）は、高校「国語」との関わりで大学生の「書く」力を育成するモデルを提示する。島田（2012）は、高校の「書く」指導について問題の所在を指摘したうえで、各大学、学生の実情に合わせた日本語指導を行うことを述べる。入学後の初年次教育に関しては、福岡（2007）によるアカデミックライティングの実践、田中他（2009）による学部単位で実施した「国語力育成プログラム」の実践などがある。

これらの研究の流れをみる限り、大学生の日本語力に関しては、入学前そして入学後においても、それぞれの段階ならではの課題が存在することが理解される。それは、全ての学問分野の理解を支えるものこそが、確かな日本語力であるからであろう。

では、実際、大学生の日本語力はどの程度のものなのであろうか。小野他（2005）では、19大学6短大を対象に、日本語力を測定するテストを実施した。判定基準として6段階（中1～高3以上）を設定したところ、私立大1年生の19%、短大1年生の35%が「中学生レベル」と判定されたという。このような状況では、専門性が高まる大学授業を十分理解することはできない。レポートを書く以前の問題である。また、石井他（2005）では、大学生の学力低下に対する意識調査の結果が紹介されている。調査の結果、「自主的、主体的に課題に取り組む意欲が低い」という項目が最上位として挙げられ、「論理的に思考し、それを表現する力が弱い」、「日本語の基礎学力が低い」がこれに続く。「表現する力」や「日本語の基礎学力」という語をみるにつけ、大学生における日本語運用能力の低下は看過できない問題であることがわかる。

なお、本稿で扱う履歴書指導に関する先行研究には、錦織（2007）、北原（2013）などがある。錦織（2007）は、高専国語の時間において履歴書を書く練習を取り入れ、履歴書作成を取り入れるメリットとして、「書く」ことに対するモチベーションの上昇、将来に活かせる実践的なスキルの習得を挙げる。北原（2013）は、日本語コミュニケーション能力の向上に資する実践を報告し、その中で、就職試験で課される小論文対策の勉強法を紹介する。両者とも高専、

短大の実践ということで、20歳で就職をする学生に対しては、授業内における系統だった指導が欠かせない、別の言い方をすれば、授業内で指導を行わなければ就職活動に必要な日本語力を身につけることができない、ということを指摘することができる。

以上、大学生の「書く」力に関する先行研究、実践を紹介した。それでは、本学短期大学の学生は、「書く」作業において、どのような問題を抱えているのだろうか。以下より、1年次後期科目「文章表現」の指導体制を紹介し、履歴書指導の過程で見受けられた表現力の問題点について指摘する。

### 3. 「文章表現」の指導体制について

「文章表現」の指導は専任教員5名で担当している。履歴書指導は、授業回数15回のうち4回ほどの時間を充てる。履歴書指導の第1回目は、相手に伝わる文章構成の方法や、項目毎の記入の留意点について説明する。時間的な余裕がある場合は、「私の長所」や「学生時代に力を入れたこと」など、履歴書の項目としてしばしば取り上げられる内容について、事前に原稿用紙1、2枚の作文を書く。ちなみに、本学の履歴書の項目は、1項目あたり150字程度で記述する必要があるため、書くべき内容を絞り、表現の無駄を省かないと、無個性で表面的な内容の記載になってしまう。そこで、最初は、ある程度の分量を書き、そこから執筆内容を厳選することで、その学生らしさを伝えるという方法を採用する。

2回目以降は、個人指導を中心に行う。先にも述べたが、対話を重ねることで、学生は自分らしさに気付くことになる。目指すべきは、学生が自問自答を重ねることで、自分らしさを深めていくことであるが、まずは、学生の基礎的な日本語力がどの程度のものであるかを把握し、表現上の問題点を指摘することから始めている。

なお、今回サンプルとして取り上げた例は、2013年度「文章表現」において、学生が執筆した履歴書にみられたものである。

### 4. 学生の日本語力について

以下より、学生の履歴書指導を経て抽出された問題点をまとめる。語彙レベルの問題、文レベルの問題、文章レベルの問題の3点に分けて示す。

#### 4.1. 語彙レベルの問題

語彙レベルに関する問題としては、語彙力の不足による問題と、履歴書という書類の性格を捉えきれていないことによる問題に大別できる。後者については、履歴書を読む者の立場で記述内容を読み返し、推敲する力がないことに起因する。読み手が履歴書を手に取ったときに、いかに読みいかに評価するかを想像する力がない、と言ってもよいだろう。以下、語彙レベルの問題を具体的に挙げる。

##### 4.1.1. 語彙力の不足

語彙力の不足から、同じ表現を多用する傾向にある。特に文末に「思う」「考える」などの思

考動詞を多用し、単調な印象を与える。また、自身の心情や経験・状況を描写する語彙が不足しているため、「～を頑張った」「～が得意だ」「～が好きだ」などの表現がしばしば見られる。履歴書執筆の初期段階においては、「頑張った」ことを、事実の描写や、他者からの評価などの客観的な事柄で表すことはなかなかできないようである。

さらに、履歴書執筆の初期段階で散見される書きぶりに、具体的な事例を挙げずに、「様々な」「多くの」「よく」「とても」などの程度を表す表現を使用するものが挙げられる。例えば、「様々な体験から多くのことを学んだ」といった一文を書く学生がいるが、それでは何も伝わらない。「様々な体験から多くのことを学んだ」学生は他にも大勢いる。その人だけのエピソードを盛り込むよう指導したいものである。それには、限られたスペースで自分らしい経験を伝える語彙力が求められる。

#### 4.1.2. 読み手意識の不足

履歴書にふさわしくない語の使用も確認される。これは、履歴書という書類の性格を捉えきれていないこと、読み手の立場に立って自らの文章を読み返す力が備わっていないことに起因する。以下、しばしばみられる問題点をカテゴリーに分けて示す。

##### (1) 敬語の過剰使用

丁寧に述べようとするあまり、敬語が過剰になる例がみられた。読み手を配慮するからこそ丁寧になると言えるが、適切な配慮ができないという点で、過度な敬語使用も、読み手意識が十分ではないことの表れとなる。

例1 アルバイトで食品販売をやらせていただきました

例2 (代表委員の活動で) 他大学さんと様々な面に関わる仕事をしました

例1「させていただきました」は、本来、聞き手（ここでは読み手）に許可を得て行う行為に使用する表現である。ここ最近では、本来の意味が失われ、単に丁寧さを表したい場合に使用される傾向にあるが、本義を考えれば不自然な言い方である。続いて、例2の「他大学さん」も、履歴書上で他大学に配慮する必要はないため不自然となる。もっとも「組織名称＋敬称」の言い方は、話しことばでは時折聞かれるが、配慮すべき相手がいない場での使用は控えるべきである。

##### (2) 日常語の使用

履歴書の表現としてふさわしくない日常語を取り上げる前に、大学生が抱える語彙力の問題について述べる。以下は、国立教育政策研究所教育課程研究センターが2005年に調査した高等学校教育課程実施状況調査から抜粋した設問である。

日本語の語を、ある基準で次のA、B、Cの3つのグループに分けると、「桜（さくら）」という語はAのグループに入る。「桜（さくら）」という語と、Aのグループの語に共通する点は何

か、書きなさい。

- |   |   |     |      |      |    |
|---|---|-----|------|------|----|
| A | [ | 宿屋  | 跳ぶ   | わざ   | …] |
| B | [ | 旅館  | 跳躍   | 技術   | …] |
| C | [ | ホテル | ジャンプ | テクニク | …] |

この問いは、語の語彙的な構造を尋ねたものである。同じ意味を表す事柄を異なる語種で表し、それぞれA和語・B漢語・C外来語の順番でカテゴライズしたものであるが、この問いの通過率は27.5%であり、設定通過率65%をはるかに下回る結果となった。記述式であるため、解答の適切さには幅があるが、出題者が意図した解答、すなわち和語・漢語・外来語の語種に着目して解答を導いた生徒は7.4%に留まった。また、無解答率も40.2%と高い。他の問題に比べて無回答率が高いことから、日常生活において、語彙の種類を意識する機会はほとんどないことが推察できる。

それでは、語彙の選択に意識が及ばないことが、履歴書執筆においてどのように関わってくるのだろうか。いくつか例を挙げる。

**例3 お絵かき教室に通っていました**

**例4 お泊まりセットを持ってドライブをします**

**例5 たまにジョギングをしています**

**例6 しっかり授業を受けています**

**例7 (文頭)なので**

例3、例4の「お絵かき教室」「お泊りセット」は、履歴書の表現として、やや幼稚な印象を与える。接頭語の「お」＋和語の組み合わせが、柔らかい響きをもって伝達されるからであろう。一般的な傾向として、和語より漢語の方が形式的な場にふさわしい表現となるため、ここでは「絵画教室」「宿泊の準備」などの表現に改めたい。

例5の「たまに」も、話しことばでよく聞く表現である。こちらも「しばしば」や「時々」などの表現に変更の方が望ましい。もっとも、程度の副詞に関しては、その副詞から受ける印象や程度の判断が各人で異なるため、できるだけ具体的な数値（例5の場合は、週何回であるなど）をもって示す方が、読み手に対して誠実な表現となる。

例6の「しっかり」も「たまに」と同様、程度の副詞に分類される。意味的に良い印象を与える「しっかり」は、履歴書には頻用される表現であるが、多義的な意味を持つため、できることなら文脈に合わせて言い換えたい。たとえば、以下のような表現に代替することができる。

**例6' しっかり**

「しっかり授業に出る」→「確実に」「休むことなく」

「しっかり練習をこなす」→「十分に」

「目指す道をしっかり進む」→「着実に」

最後に取り上げるのは、例7の文頭に置かれる「なので」である。こちらの表現は、話しことばでは、かなりの頻度で聞く。文法的に言えば、「なので」は、断定の助動詞「だ」の連体形または形容動詞の連体形活用語尾「な」に理由を表す接続助詞「ので」が後接した形式であり、接続詞としては認定されていない。「なので」とほぼ同義の接続表現としては、「だから」「したがって」「そのため」「よって」などがあるが、これらは、前件と後件の因果関係を強く示す接続詞であるため、場合によっては、堅苦しい説明口調といった印象を与える。対して、文頭に置かれる「なので」は、柔らかい印象を与えながら因果関係を示す表現として選択されがちであるが、その使用には注意を促したいところである。

以上、履歴書執筆にあたって、語彙力、語彙量が不足していることによる問題を取り上げた。ちなみに、言い換えの例として示した語彙は、学生にとっては、理解語彙でもあるし使用語彙でもある。履歴書を執筆する際に、内容を考えることと同じくらい、語の使用にも意識が向くような指導を心掛けたい。

### (3) 仲間内ことば・若者ことばの使用

先に取り上げた日常語の使用と近い問題であるが、仲間内ことば、若者ことばの使用について述べる。

**例8 桐華祭実行委員を務めました**

**例9 マンガのキャラを描くのが趣味です**

**例10 JRCの活動に力を入れました**

例8にみられる「桐華祭」は本学学園祭の名称である。学外の人にとって、本学の学園祭が「桐華祭」という名称であるのは、言ってみればどうでもよいことで、「桐華祭」は、学内でのみ通用する仲間うちことばである。ここでは、学園祭における実行委員としての経験、学びを執筆することに価値があるので、「学園祭の実行委員を務めました」で十分である。

日頃の履歴書指導において、指導にあたる者は、執筆者の人となりがわかるように「具体的に書く」ことを指導する。しかし、「誰が読む」のか「情報として伝えたいことは何か」といった点に配慮が及ばないと、不必要な情報まで具体化してしまうことがこの事例からもわかる。

続いては、例9の「キャラ」、例10の「JRC」という表現に注目したい。自明のとおり「キャラ」は「キャラクター」の略であり、若者間で使用する表現というより、今や一般的な表現になったともいえる。しかし、履歴書というフォーマルな文書においては、できるだけ省略語の使用は避けたい。また、「JRC」は、Junior Red Cross（青少年赤十字）の頭文字を取った名称である。文脈から「JRC」が青少年赤十字を指し、社会貢献活動に注力したことは容易に理解できるが、一般的に周知されていない省略語の使用は避けるべきである。

以上、仲間うちことば、若者ことばの使用について述べた。仲間うちことば、若者ことばは、語によっては一般化しているものもあり、先に取り上げた「キャラ」のように、読み手の世代を問わず、十分理解できるものもある。しかし、履歴書執筆という場において相応しくないと



ということで、その使用は再考する必要があるだろう。場に合った表現ができるかどうか問われているといえる。

#### 4.2. 文レベルにおける問題点

一文レベルにおける問題点として、しばしば取り上げられるのは主述の呼応に関わるものである。文法に関わる問題といってもよい。

今回の調査においては、主述の呼応の問題に関して、「私の趣味は〇〇をすることが私の趣味です」といった類のものは見当たらなかった。前期に「日本語表現」という授業において、主語と述語を意識することを学んだ効果であろうか。ただし、日常的な表現を使用してしまうことで、結果として主述の不一致に至った例があった。

##### 例11 趣味は羊毛フェルトです

主述を意識した文に直せば「趣味は羊毛フェルトで〇〇を作ることです」になるだろう。述語に置かれた「羊毛フェルト」はあくまでも素材であって、主語である「趣味」の述語を受けることにはならない。

この事例のように、内容としては伝わるが、表現としては熟していない文については、学生とともに、その都度、「不必要な要素が入っていないか」「要素として不足はないか」などのチェックを行うことが肝要となる。主述の呼応を確認することを習慣化することで、いずれ学生自身が表現の不自然さに気付くような指導を行いたい。

#### 4.3. 文章レベルにおける問題点

文章レベルにおける問題点としては、まず、文章を構成する一文が長いという問題を挙げる。情報を整理して簡潔に書くことができず、思考の過程をそのまま文章にしてしまったことが原因となる。

**例12 スーパーでアルバイトをしています。グロサリーという部門で、商品の品出し、陳列などの作業を通して、お客様が商品を手に取る上で見やすさやきれいな配置を心がけ、自分が並んだ商品が売れると、気持ちがよく、やりがいを感じました。**

2文目に「仕事内容」「心がけたこと」「やりがい」の3つの要素が組み込まれているために、読みにくい文となっている。冒頭の一文は、一文一義で簡潔だが、2文目は、テ形（作業を通して）、連用中止形（心がけ）を用いており冗長な印象を与える。履歴書の内容として盛り込む要素は十分であるので、少なくとも2つの文に分けたいところである。そうすることで、原文では不明瞭な主述の呼応も明確になる。

なお、本例においては「グロサリー」という語が使われているが、「グロサリー」という語が一般的かどうかもある必要があるだろう。履歴書を執筆するスペースは限られている。ここでの「グロサリー」が、単に商品の陳列・品出しに関わる部門を指しているとしたら、あえて

書く必要はない。履歴書の執筆においては、論旨を明快にするために、不必要な要素を排する意識も求められる。

続いて取り上げるのは、オリジナリティの欠如に関わる問題である。まず例文を挙げる。

**例13** 高校時代の部活動です。部員をまとめるのは思っていたより骨が折れましたが、そのおかげで部員たちとのコミュニケーションが円滑にとれました。部活動を通して人との結びつき、何事も全力で取り組むことの大切さを学べたことは私にとってとても良い経験になりました。

例13は、「学生時代に力を入れたこと」として、ある学生が書いてきた内容の全てである。文法的な間違いはなく、一文の長さも適切であるが、市販されている履歴書執筆の指南書をそのまま引用したような文言が並び、印象に残らない。部活動名はもちろんのこと、具体的な活動内容が何も記されていないことにその理由がある。また、学んだことの記述が唐突すぎて、無理やりまとめたという印象を与える。

先にも述べたが、履歴書の執筆スペースは限られている。表現を圧縮し、具体例を挙げるスペースを確保したいところである。本例であれば、「何に骨が折れたのか」「部活動の何を通して、人と人との結びつきや全力で取り組むことの大切さを学んだのか」を書き入れる必要がある。

なお、このような文章は、表現することに自信がある学生が書いてくる傾向にある。履歴書の書き手が誰であっても通用するような内容は書いても意味はない。そのことを、過去の事例や書き直しの結果を紹介しながら強調する必要があるだろう。

## 5. おわりに

以上、実際に学生が執筆した履歴書から、語レベル、文レベル、文章レベルの問題点を指摘した。

語レベルに関わる問題点としては、他者意識、つまり、読まれるという意識の不足が大きな問題として挙げられる。履歴書執筆においては、仲間うちことば、若者ことばの使用を避けると同時に、自分の考えや想いをより正確に表現するという意識を涵養したいものである。日常生活においても、多義で意味範囲の広い語を使用するのではなく、当該文脈において最も適切となる語を選択する意識を身につけさせたい。具体的には、履歴書執筆に頻用される語彙をグルーピング化し、そのリストを学生に提示することで、履歴書に用いる語を厳選するという機会を提供したい。思考を表す動詞として、いつも「感じる」、「思う」、「考える」では、表現が単調になってしまう。文脈に合わせて、「提案する」「企画する」「期待する」「希望する」などの「漢語＋する」も活用できるような、豊かな語彙力を育てたい。なお、類義語リストを手がかりに語彙を増やしていく活動は、日本語非母語話者を対象にする日本語教育では既に多くの実践がある。それらの実践に学びながら、履歴書執筆の場面に適したリスト作成を考えるのが今後の課題である。



文レベルに関しては、主述の呼応を意識するべく、日頃より簡潔で短い表現を用いるよう指導を心がける。もっとも、話しことばによるコミュニケーションにおいては、コンテキストや状況に依拠したやりとりがなされ、主述の呼応は不正確である場合も多い。事実、主述の呼応が不正確であっても、コンテキストや状況の支援を受け、コミュニケーションそのものに問題が生じることはない。ただ、就職活動を控えた学生の指導としては、物事や事柄を簡潔な文で表現させることに意識を向けさせたい。例えば、ゼミや演習など、日常的になされる発表場面を利用し、自分のことばを意識する場を意図的に設けたい。話し始める際に、着地点である述語を想定させることで、一文一義を意識した指導を行いたいと考える。

文章レベルにおける指導においては、ストーリーをどのように展開させていくか、型を示しながらの指導を心がける。市販のエントリーシートの書き方にも、いくつかの具体例は掲載されているが、記載されている内容はリーダーの経験であったり、ボランティア活動や留学の体験だったり、成功体験に基づく事例が多く、本学の学生にとって身近に感じられる例は多くない。そこで、指導にあたっては、身近な事例にも応用することができるような型を提示することを提案したい。型を提示することで、誰もがある程度のレベルの履歴書を執筆することができるだろう。例えば、得意な科目の記述にあたって、筆者が担当している「日本語の世界」を例にするならば、以下のようになる。

#### 例14 得意な科目「日本語の世界」を例に

- ① 何を学んだ・・・「ら抜きことば」は「ことばの乱れ」ではなく変化である
- ② 何を感じた・・・「変化」の背景を知ることは面白い
- ③ 何を考えた・・・何気ない「変化」にも理由があり、「変化」にはメカニズムがある
- ④ どう行動した・・・ことば以外の様々な現象に対して、それが生じる理由を考えるようになった

もっとも、型を提示したとしても、③「何を考えた」、④「どう行動した」あたりは、どのように書いてよいかわからない学生もいることだろう。自らの学びや行動を客観視することができなければ、自分の「今」に学びの内容がどのように活かしているかを、言語化することはできないからである。採用側は、学生の「今」を知りたい。得意な科目の科目内容を知りたいのではなく、得意な科目を通して見える学生の「今」を知りたいのである。このような、採用側の意図に関して、意識が希薄な学生が多いため、履歴書指導にあたっては、型を示し、対話を重ねながら、その学生らしさを引き出すことに注力したい。

なお、キャリアの文章の文章構造について、日本語学的な関心からは、古本（2013）の論考がある。古本（2013）は、エントリーシートの書き方の解説書9冊を対象に「大学で力を入れたことは何か」に相当する回答を抽出、表現内容からいくつかの区分を設定し、その文章構造を指摘する。ただし、他の質問項目には言及がなされていないため、学生指導にあたっては、本学の履歴書の項目に沿った内容を考案できたらよいだろう。

以上、学生が執筆した履歴書から、語・文・文章の各レベルにおける問題点を指摘した。今後は、これらの問題点を改善すべく、本学の学生のレベルに見合った指導法、チェックリスト

を考案する。そして、履歴書の執筆項目について型を提示し、チェックリストに基づく推敲を促すことで、学生自らが、自らの手で履歴書を修正できるような効果的な学習方法を考えたい。

## 付記

本研究は、十文字学園女子大学プロジェクト研究費（競争的学内資金）「本学における学士力としての日本語運用能力向上のためのカリキュラム開発」（研究代表者：星野祐子）の研究の一部である。

## 参考文献

- 石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木規夫・荒井克弘・大竹洋平（2005）「大学生の学習意欲と学力低下に関する大学教員の意識についての調査研究」『大学入試センター研究紀要』34 大学入試センター pp.19-58
- 小野博・村木英治・林規生（2005）「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育—IT活用学力支援研究—」『NIME 研究報告』第 6 号 メディア教育開発センター p.142
- 北原泰邦（2013）「キャリア教育における文章表現—指導と実践の報告—」『信州豊南短期大学紀要』30 信州豊南短期大学 pp.167-201
- 島田康行（2012）『「書ける」大学生に育てる AO入試現場からの提言』大修館書店
- 千古利恵子・中條敦仁（2007）「キャリア教育としての「書く」力の育成—「国語」教育との連携を目指して—」『京都文教短期大学研究紀要』46 京都文教短期大学 pp.120-130
- 田中賢治・近森節子・徳永寿老・山田晃（2009）「大学初年次における「国語力育成プログラム」の開発—立命館大学経済学部を事例として—」『大学行政研究』4 立命館大学 大学行政研究・研修センター pp.49-63
- 錦織浩文（2007）「履歴書を用いた作文指導」『阿南工業高等専門学校研究紀要』第43号 pp.32-36.
- 福岡寿美子（2007）「アカデミック・ライティングにおける分析について—基礎演習学生のレポートを中心に—」『日本語教育論集』16 姫路獨協大学大学院 pp.96-103
- 福岡寿美子（2011）「入学前教育について—日本語の事例を通して—」『日本語教育論集』20 姫路獨協大学大学院 pp.41-48
- 古本裕子（2013）「就職活動における自己PR文の談話分析」『日本語教育方法研究会誌』20(3) 日本語教育方法研究会 pp.80-81